

児童養護施設退所者の 自己肯定感向上の契機



小田川華子
首都大学東京非常勤講師

公開セミナー「子どもの貧困／不利／困難を考える」
Part 1 貧困／不利／困難に負けない力（レジリエンス）と自己肯定感
2015年7月25日

本報告の構成



1. 研究の枠組み
2. インタビュー対象者の概要
3. 自己肯定感向上の契機についての考察（退所前）
4. 自己肯定感向上の契機についての考察（退所後）
5. 退所者の生き方哲学
6. 児童養護施設での処遇への示唆のまとめ
および“ホーム”の必要性

本研究は、科研（B）「貧困に対する子供のコンピテンシーを育む福祉・教育プログラム開発」（代表者・埋橋孝文、2011～2013年度）の一環として行われた、養護施設退所者に対するインタビュー調査を報告するもの

1. 研究の枠組み



研究の目的



- ✧ 児童養護施設出身者が、施設での生活期間を含む現在までの生き立ちのなかのどのような場面で自己肯定感を向上させることができたのか、また、その背景には何があったのかを施設退所者自身の語りから明らかにすることにより、児童養護施設での支援（インケア）および退所後支援（アフターケア）に関する示唆を得ること

調査方法



対象者

- 児童養護施設を中卒または高卒で退所し、自立した方（一部、家庭復帰した方を含む）8名

インタビュー

- 2013年7～12月、1時間半～2時間
- ワークシート（自己肯定感の推移）の記入

分析手法



❧ 自己肯定感がワークシートの中央よりも下位に落ちたのちに向上しているターニングポイントに着目し、向上の契機に関わった人や出来事を分析

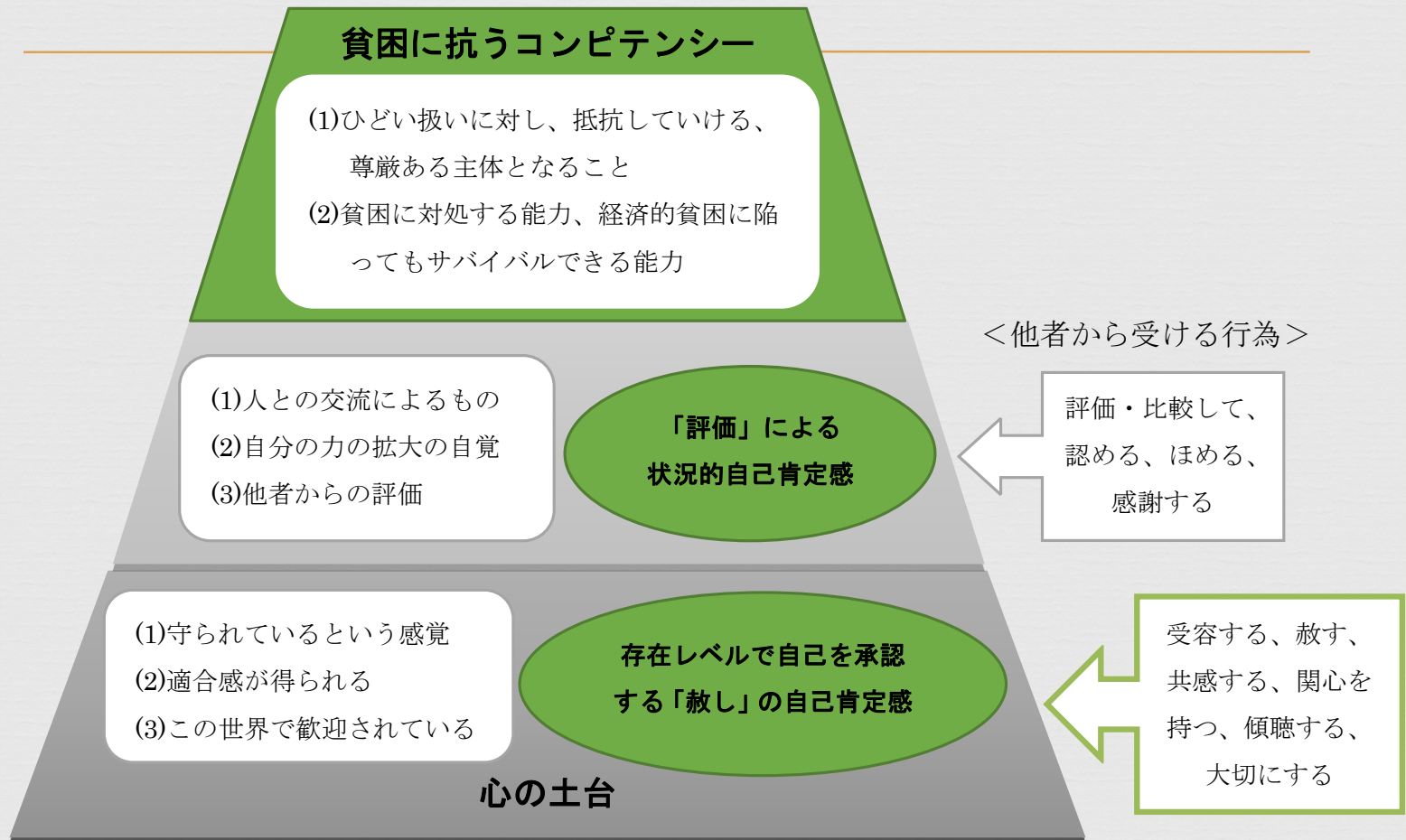
❧ SCAT=聞き取ったデータに

- 〈1〉 データの中の着目すべき語句
- 〈2〉 それを言いかえるためのデータ外の語句
- 〈3〉 それを説明するための語句
- 〈4〉 そこから浮き上がるテーマ・構成概念

の順にコードを考えて付していく4ステップのコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きから成る分析手法である (大谷2008)

概念枠組み

図1 コンピテンシーと自己肯定感の構造



(出所) 伊田(2007)、根元(2007)、高垣(2010)より筆者作成。

2. インビュー対象者の 概要



表1 インタビュー対象者のプロフィール



対象者コード	調査時年齢	性別	退所後経過年数	入所期間(措置変更の履歴)	最終学歴
Aさん	21歳	女性	3年	2歳～18歳(大学入学して2ヵ月後)	現役大学生
Bさん	20歳	男性	3年	12歳～18歳(高卒時)(他種施設→養護)	現役大学生
Cさん	21歳	男性	3年	17歳～18歳(高卒時)	短大卒
Dさん	26歳	男性	8年	8歳～18歳(高卒時)	大卒
Eさん	24歳	男性	8年	2歳～16歳(高校中退時)	高校中退
Fさん	30歳	男性	14年	2歳～16歳(中卒時)(施設→里親→施設)	中卒
Gさん	29歳	女性	15年	5歳～14歳(中3春、家庭復帰)	大卒
Hさん	36歳	男性	18年	10歳頃～18歳(高卒時)(他種施設→養護)	高卒

グループピング



各対象者の自己肯定感の推移は別紙

ポジティブ・インケア・ グループ (PI)

入所を契機としてまたは入所期間中に自己肯定感の向上が見られたグループ

ケース：A・B・C・D・H

ネガティブ・インケア・ グループ (NI)

入所期間中から退所後しばらく継続して自己肯定感が低かったグループ

ケース：E・F・G

3. 自己肯定感向上の契機 についての考察



退所前

ポジティブ・インケア・グループ

表2 施設退所前にあった自己肯定感向上の契機に関わった人および事柄

ケースと底の名前、年齢	施設職員	専門機関職員	学校の先生	施設(出身)の友人	学校の友人	地域の人	職場の人・仕事	家族	その他
A	◆			◆当	◇		◇		
B① 14歳	◆	●福祉司 ◆	●	●			◆		
C① 17歳	●	●福祉司	◆	● ◆当			◆		
D① 8歳	○ ◆	●福祉司	◆	○ ◆当	◆	○ ◇	◆		
H① 9歳	●								
H② 16歳	○		●		○				

当は当事者組織

●は自己肯定感の向上に関わったと本人が言及しているもの。

○は自己肯定感の向上に関わったことが話の内容から推測されるもの。

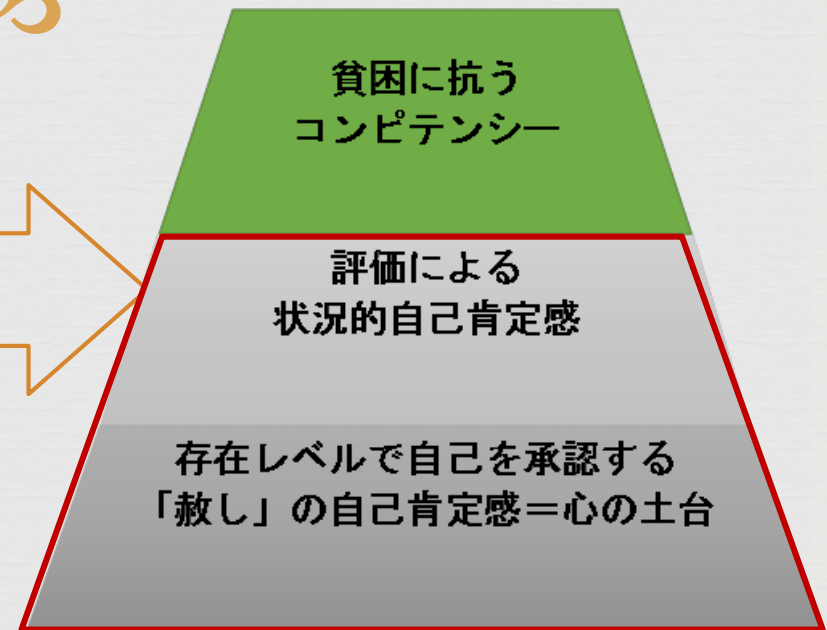
◆は向上傾向を持続させる支えとなったと本人が言及しているもの。◆は退所後。

◇は向上傾向を持続させる支えとなったことが話の内容から推測されるもの。◇は退所後。

退所前の自己肯定感向上に関わる人、出来事についての考察



- ☞ 自分を受け止めてくれる人
- ☞ 話を聞いてくれる人
- ☞ 気遣ってくれる人
- ☞ 努力や成功を認めてくれる人
- ☞ 困難に立ち向かうときに寄り添ってくれる人



- ☞ このような人の存在を認識し、受容され、信頼されていると感じることのできる人間関係を**重層的に構築**

自己肯定感向上傾向の維持



- ❧ 入所中：施設職員、福祉司、学校の友人、バイト先の人との関わり

- ❧ 退所後：Aさん、Cさん、Dさんの事例から
 - ❧ 施設職員、大学の先生、施設出身の友人（当事者組織）、職場の人
 - ❧ 当事者組織は、心の支えとなる友人との結びつきや、ネットワーク、チャンスの拡大としての役割があり、自己肯定感の向上、維持に影響

4. 自己肯定感向上の契機 についての考察



退所後

主として

ネガティブ・インケア・グループ

表3 施設退所後にあった自己肯定感向上の契機に関わった人および事柄

ケースと底の名前、年齢、(退所後年数)	施設職員	専門機関職員	学校の先生	施設出身の友人	施設外の友人	地域の人	職場の人・仕事	家族	その他
E① 20歳 (4年後)		●教官 ◇保護観察官					◆	◆	● 哲学書
F② 17歳 (1年後)				●				●	
F③ 20歳 (4年後)				◆当		●	◆	◆	
G① 23歳 (9年後)	○			○ ◇			● ◆	○実家の店	
H③ 22歳 (4年後)	●						●		
H④ 35歳 (17年後)							●		

当は当事者組織

●は自己肯定感向上の契機に直接関わったと本人が言及しているもの。

○は自己肯定感向上の契機に関わったことが話の内容から推測されるもの。

◆は向上傾向を持続させる支えとなったと本人が言及しているもの。

◇は向上傾向を持続させる支えとなったことが話の内容から推測されるもの。

(1) 仕事



- ☞ 自分の経歴を理解してくれている職場で責任ある仕事を任せ、独立する力も認められている (E)
- ☞ 自分の問題意識、やってみたいことを発信する機会があり、そのチャレンジを支持してもらい、主体的に仕事をすることができ、「どんどんエンパワメントされていった」 (G①)
- ☞ 期待され、頼りにされ、新事業の責任者を任せられたことが「ありがたかった」 (H③および④)

(1) 仕事



- 収入を得て生活を安定させていくこと
- 自分がやりたい仕事、自分に合った仕事ができていること
- そこで成果をだして肯定的な評価を得ること

自己肯定感
の向上

- 本人に合っていない仕事内容 (Fさん、Hさん)
- 施設退所者への差別による職場でのいじめ (Gさん)

自己肯定感
の失墜

(2) 結婚

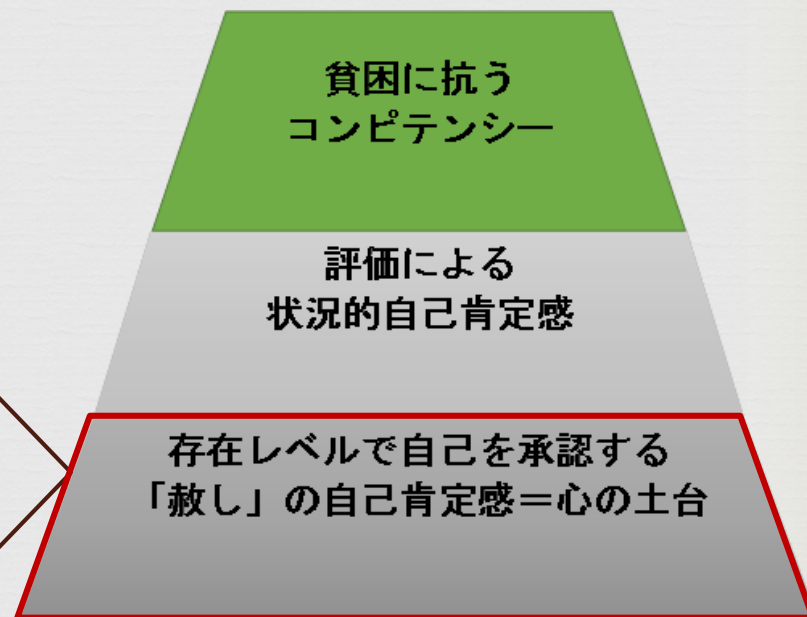


- ❧ 共感し合えるパートナーを得、拠り所となる“帰る場所”ができるという安定感と安心感につながる
- ❧ 家族を養わなければならないという責任感が芽生え、前向きな気持ちで就職、仕事をするきっかけにもなる

(3) “拋り所となる場” “再起の場”



- ✧ Eさんの怒りに共感、受容し、再出発を後押ししてくれた教官との出会い
- ✧ 絶望のどん底にいたFさんを保護し、苦悩の経験を糧にという価値転換を促し、再起を見守ってくれた近所のおばさんの存在



「赦し」の自己肯定感と仕事



- ❧ 仕事による自己肯定感の向上の前提として、心の土台となる「赦し」の自己肯定感があるのではないかと
- ❧ Eさん：教官との出会いを経たのちの就職で自己肯定感向上
- ❧ Fさん：近所のおばさんとの出会いを経たのちの就職で自己肯定感向上
- ❧ Gさん：施設出身のありのままの自分を受け入れてくれる職場での、やりがいのある仕事で自己肯定感向上
- ❧ Hさん：施設職員との信頼関係が継続し、「こころの土台」は維持していたうえの抜擢で自己肯定感向上

退所者の生き方哲学



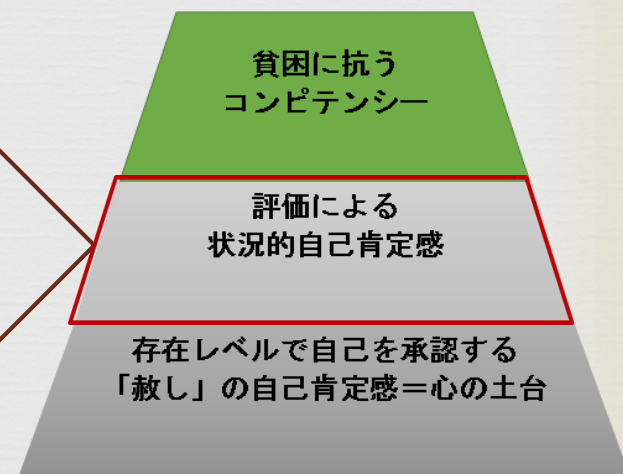
- (1) 「つらい体験を力に」という発想転換
- (2) 自分の人生を選び取るという思想

(1) 「つらい体験を力に」 という発想転換



- ☞ Cさん：進路を考えるプロセスで「虐待を受けてきた経験を強みに」
- ☞ Fさん：仲間の死にあってもっとも苦しかった時期から這い上がるプロセスで「辛い経験を糧に」

寄り添っていた人による、
自己肯定感を回復する力（レジリエンシー）を与える働きかけ



(2) 自分の人生を選び取る という思想

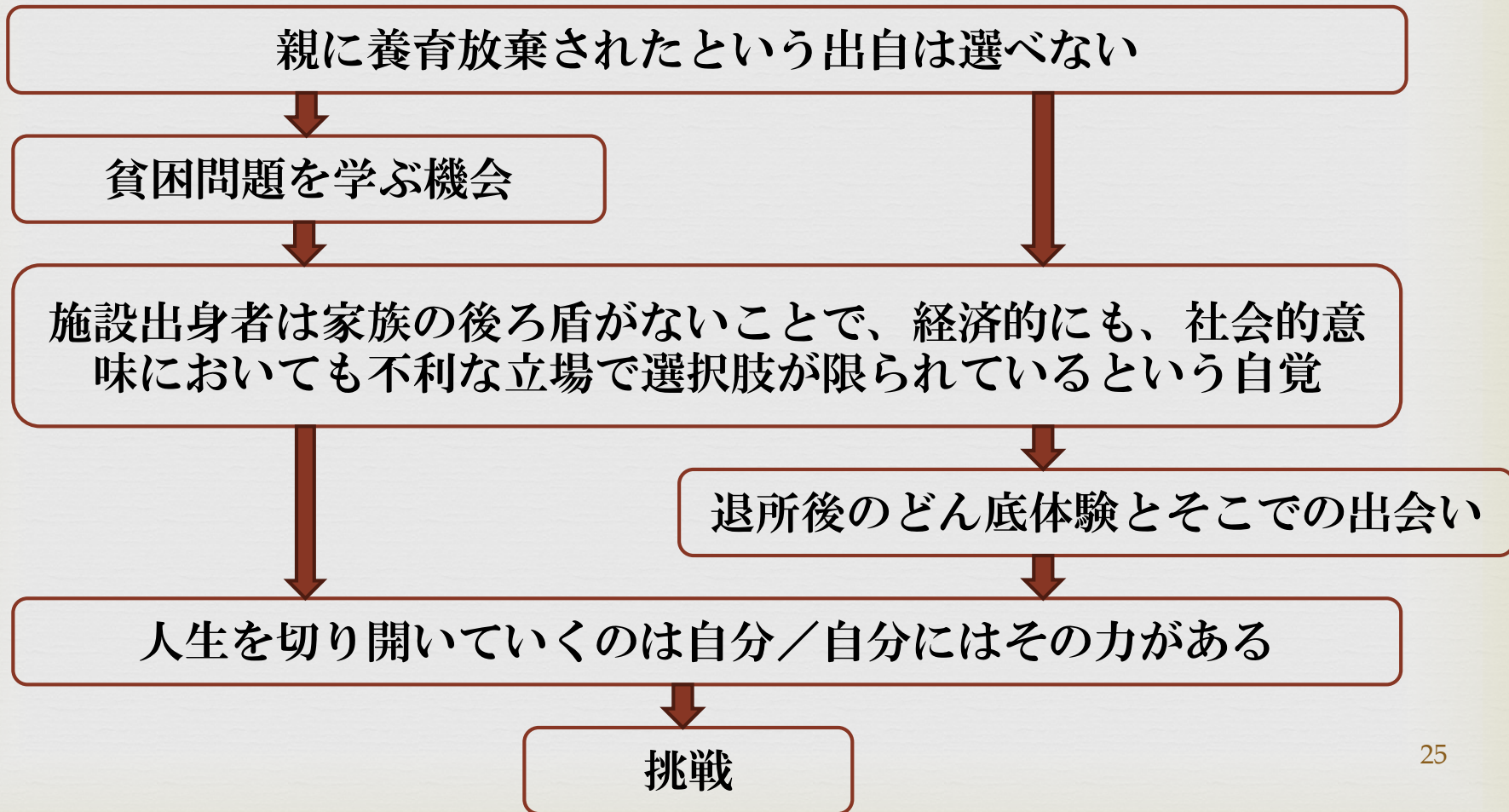


Eさん：やるか、やらないか、学ぶか、学ばないかによって差が生まれる

Fさん：生まれる家庭は選べないが、これからどうしていくかは自分が選べる

Aさん：自分で選んでできるというところを見せたい

ストーリーライン



児童養護施設での処遇への示唆のまとめ



および

“ホーム”の必要性

施設での生活



- ☞ 日常生活のなかのもっとも身近な大人として施設職員は子どもを受容し、**子どもが自分を存在レベルで承認する自己肯定感（心の土台）を形成**できるような関わりをする
- ☞ 近隣や学校、バイトなど**施設の外での人間関係**のなかで、子どもが自己有用感や自己効力感をもてるよう支援する
- ☞ 施設職員が子どもの手本となるような行動規範をもって仕事にあたる（**大人のロールモデル**を示す）
- ☞ 必要に応じて子どもが**施設外の専門機関の職員**から援助を受けられるようにする

退所に向けて



- ☞ 子どもが自分の生き方を自分で決められるよう、**多様な情報**を得られるようにする
- ☞ 進学、就職、一人暮らしに向けた**退所準備**を支援する
- ☞ 退所後も**抛り所となる場所や人間関係が途切れない**よう、**抛り所となるつながりを施設職員との関係の他に1つ以上も**てるように支援する

退所後に心の土台をサポートする仕組みの必要性



- ❧ 自己肯定感を失墜しても回復することのできる力（レジリエンシー）を施設入所中も、退所後も継続して培っていくこと
- ❧ その前提として、心の土台となる「**救し**」の自己肯定感を維持、回復することが不可欠
- ❧ 退所後にそれをサポートする仕組みを**施設外の枠組み**で作ることが必要
- ❧ 当事者組織の他にも

“ホーム”の必要性



“ホーム” = 安心できる環境で、よき助言者による支援と見守りのなか、自省して再生、再起する場

